

南米旅行と高山病

吉田 真人

十年前の二〇一一年一月に南米を旅行した。雪の成田を出発し、乗継地の米国アトランタに着いたが、何と歴史的な降雪で、ブエノスアイレス行きの方がキャンセル。空港の床でごろ寝の一夜となり前途多難を感じさせた。

翌日深夜ブエノスアイレス着、その後イグアスの滝、ペルーの首都リマ、マチュピチュを周り、無事最終訪問地であるインカ帝国の旧都クスコに着いた。

ここは海拔三千四百呎の高地にある。息苦しい。常に深呼吸が要求される。六百八十hPa程と気圧が低く、酸素濃度は平地の約三分の二しかない。

ホテルで軽く夕飯を食べ、寝る。併し寝られない。寝ながら深呼吸は出来ない。ウトウトすると息苦しくなりすぐ目が覚める。そこで深呼吸。又ウトウト。

殆ど不眠のまま朝になる。午前インカの市が開かれる街へ、車で一気に二千八百呎まで降ると息苦しさは忽ち解消。午後はクスコ市内見物、深呼吸又深呼吸で何とか過ごす。夜は町中のレストランへ。ペルー産の赤ワインと共に珍しい肉料理、アルパカとクイ（天竺ネズミ）を食す。いずれの肉も程よい噛み応えで、ややワイルドな味がした。欧州の鹿や野ウサギの様なものか。

ホテルに戻り就寝。しかし再び全く眠れない。意識が朦朧としたまま朝になる。別室の相棒は深夜フロントに連絡し簡易な酸素吸入を受けた由。そういう手があったかと悔やんだが後の祭り。空港に向かう。

出発ゲートに行くとき、リマ行き飛行機は何と百呎程離れた彼方に駐機しているではないか。半病人というか夢遊病者の如く機体に向け夏空の下を歩く。あと五十呎、あと二十呎と必死に歩く。何とか倒れないで転がり込んだが、この間のきつさは多分現下の中等症以上のコロナ患者の苦しみと同じであろうか。

リマでの遅い昼飯時に、高山病に一番悪い影響を及ぼすのは飲酒であるとの記事を発見、相棒と二人で納得して大笑い。リマは海岸縁りにあり、従って酸素も十分で、海老と白ワイン（チリ産だが）の美味しい町であった。